

『凛々たる人生』

— 志を貫いた先人の姿 —

東京大学名誉教授 月尾嘉男

【第十一回】

近代日本の経済基盤を構築した

渋沢 栄一



渋沢栄一 (1840-1931)

埼玉の名家の出身

今年七月から日本の紙幣の意匠が二〇年ぶりに変更され、一千元券には北里柴三郎、五

千元券には津田梅子、一万元券には渋沢栄一の肖像が使用されます(図1)。いずれも江戸時代の末期に誕生し、明治時代から大正時代に活躍し、昭和の初期に逝去した偉人です。意図されているかどうかは不明ですが、旧券

図1 新二万円札



も新券も一千元券は学者(野口英世)、五千元券は女性(樋口一葉)、一万元券は財界で活躍した人物(福澤諭吉)が選定されています。

今回は一万元券の意匠に登場する渋沢栄一を紹介します。渋沢は江戸時代末期の一八四〇(天保一一)年に武蔵国榛沢郡血洗島村(埼玉県深谷市血洗島)に誕生しました。この物

騒な名前の由来は諸説ありますが、平安時代に八幡太郎義家が奥州遠征に向く途中に一带で合戦があり、片腕を喪失した武士が傷口を洗った場所であったという伝承があり、島という名前は利根川の氾濫原で、洪水のとき

には島になったからともされています。

ここには吉岡、福島、笠原、渋沢という四軒の旧家が存在し、家屋はすべて保存されていますが、渋沢の誕生した「中の家」の立派な屋敷は深谷市指定史跡として公開されています(図2)。時代とともに分家が増加して



図2 渋沢栄一の生家(中の家)

いきますが、本家の「中の家」の当主は苗字帯刀を許可される格式のある家柄でした。そして分家の「東の家」の元助が有能であると評価され「中の家」の養子となり、発展させることにな

ります。渋沢の父親となる人物です。

この一帯は米作の水田が不足してコメの収穫が十分ではなく、畑地で藍染に使用する藍を栽培し、繊維産業が発展していた信州や上州に藍玉を販売する商売が活発でした。渋沢家も渋沢の父親の時代から藍の流通に進出して成功し、血洗島村で有数の成功した商家になります。後述のように、渋沢が明治時代に銀行を設立し、数多くの企業の育成に成功していく背景には、この商売の経験が影響していると推察されます。

激動の幕末に外国を経験

渋沢はしばらく地元で学問や武術を習得しますが、二一歳になった一八六一（文久元）年に江戸へ移動して勤皇の志士と交遊するようになり、尊王攘夷の思想に目覚め倒幕の計

の徳川昭武あきたけが日本の代表として出席することになり、その随員となったのです。当初は何年もかけて西欧の事情を見聞する予定でしたが、一八六七（慶応三）年に慶喜が大政奉還をしたため急遽帰国することになり、昭武とともに翌年、帰国しました。

慶喜は帰国した渋沢に自由に進路を選択するようにと伝達しますが、それまでの恩義もあり、慶喜が蟄居ちつきよする静岡で夫人と子供とともに生活することにします。しかし、明治政府は西欧の最新事情を見聞してきた渋沢を活用するため民部省租税正に任命します。そこで渋沢は紙幣の発行、一八七二（明治五）年の東京大火からの復興計画などに参加しますが、政府内部の対立のため自由に行動できず、一八七三（明治六）年に辞職しました。

画を立案するほど過激になりますが、親類の説得により自重しました。これによって江戸から京都に移動しますが、紆余曲折があったものの一八六三（文久三）年に將軍徳川家茂いえもちの後見の役割をしていた徳川慶喜としのぶに出仕して

自分の幕臣となりました（図3）。

これが後々の渋沢の活躍の契機となります。一八六六（慶応二）年に慶喜が徳川幕府の最後の將軍になります。翌年のパリで開催される万国博覧会に慶喜の異母弟である一四歳



図3 幕臣時代の渋沢栄一（1866）

五〇〇社以上の企業を創設

民間の自由の身分になった渋沢が最初に手掛けたのが第一国立銀行の設立でした（図4）。すでに江戸時代を為替座を営んでいた三井組が銀行の設立を検討していましたが、



図4 第一国立銀行

一社による独占には弊害があると判断した渋沢は小野組と島田組にも出資させ、伊藤博文がアメリカの制度を参考にして制定した「国立銀行条例」を下敷きにして一八七三（明治六）年に銀行を設立、自身が頭取となっ

て民間取引を主軸にした金融機関としました。ところが創設の翌年に小野組が経営破綻し、最初から危機に直面します。銀行という制度が一般には周知されていない時代でもあったため、いきなりの危機でしたが、渋沢は再建の道筋を明確にし、出資者や支援者を説得して二万円弱の最小の損失で危機を処理しました。目標は財閥が設立して傘下の企業に融資する内向きの金融機関ではなく、公益となる事業を実施する民間企業を対象とする金融機関でした。

国立銀行という名称は誤解されやすいのですが、「国法によつて設立した銀行」という意味で、ナンバー銀行という言葉もあるように、創設の順番を名称にした第一から第五三まで設立され、合併されて存続している銀行も対象とすると、全国に七〇行が存続しています。その一号を実現したのが渋沢でした。

せた結果、次第に順調になりました。この成功を契機に紡績会社が次々と誕生し、一八九六（明治二九）年の日本企業の総資産額の上位一〇〇社のうち五七社が織維会社という状況は渋沢の貢献ということができます。

それ以外にも鉄道会社、ガス会社、印刷会社、電力会社、運輸会社、化学会社、建設会社、倉庫会社、食品会社、新聞会社など、あらゆる分野と表現しても過言ではないほど、明治時代以後の近代工業社会が必要とした企業の創設や経営に関係し、生涯に関係した企業は五〇〇社以上とされています。そのような意味では一万円札の表面に登場する人物として、これ以上の適任はないということができます。

転身して福祉・教育でも活躍

ここまで紹介した経済分野の業績だけでなく

さらに初期に実現した国立銀行のいくつかは渋沢が指導したり、一部は役員になったりして経営を支援しています。

第二に手掛けたのが製紙業です。急増する紙幣や債券の需要だけではなく新聞や雑誌のためにも用紙は必要であると判断した渋沢は一八七五（明治八）年に東京府王子村に抄紙会社（現在の王子製紙）を創設しました。機械は輸入、操業は外人技師で出発しますが、商品となるような用紙が生産できず、最初の決算が約四万円の赤字で、約一〇年かけて黒字になる苦境でした。しかし株主の理解で倒産は回避され立派な企業に成長しました。

さらに目指したのが紡績産業です。織維製品を大量に輸入していた状況の改善のため、国産にすべく一八八二（明治一五）年に大阪紡績を設立しますが、これも順調には進展せず、日本の技師をイギリスに派遣して勉強さ

傑出した人物ですが、それだけでは渋沢の活躍の偉大さを紹介したことにはなりません。渋沢は一九一〇（明治四三）年に古希（七〇歳）になります。当時の平均寿命は四五歳程度でしたから、古希の言葉のように相当の長寿ですが、それを契機に自身が役職に就任していた企業の大半から引退し、さらに六年が経過した一九一六（大正五）年にはすべての役職を辞退してしまいます。

それは引退して悠々自適の人生を目指したわけではなく、経済事業以外の分野に貢献することが目的でしたが、その一例が社会福祉事業です。明治から東京に移行した時期に、武士階級の人々を中心に新規の社会に対応できない人々が多数発生しました。その対策として一八七二（明治五）年に東京に公営の養育院が設立されますが、渋沢は初期から運営に関与し、逝去するまでの約六〇年間、院長

に就任してきました。

これは依頼されて就任したのではなく、積極関与したのです。一八八五（明治一八）年に東京府会で、そのような施設は惰民を増加させるだけという意見がありました。渋沢は東京府知事に建議書を提出、困窮する人々を救助することは社会の義務であり、廃止すべきではないと主張します。この建議の効果により施設は維持され、渋沢が院長を継続することにありますが、企業を経営するだけの人物ではなかったことを象徴しています。

商業を対象とする教育にも積極関与しています。江戸時代の土農工商という言葉が象徴するように、日本では商業は社会の低位の仕事と見做されてきました。そこで森有礼文部大臣が設立した東京商法講習所を渋沢が継承することになって高等商業学校、さらには東京商科大学（一橋大学）に発展させ、財政支

係を親密にしようと提案したことへの対応です。渋沢は日米国際児童親善会を設立して人形交換を實行し、アメリカから一万以上の人形が贈呈されるという活動も実行しています。急速に世界の舞台上に登場してきた隣国の中国との交流にも尽力し、一九二〇（大正九）年には日華実業協会を設立して会長となり交流を推進しています。

戦後の世界各国は戦争によって国力を増大させるという思考が主流で、頻繁に戦争が勃発していました。渋沢は経済競争により国際秩序を維持すべきという哲学で、社会の道徳水準が重要だという思想でした。そこで一九二〇年に国際連盟が設立され、それを支援する国際連盟協会が各国で設立されますが、渋沢は日本の初代会長に就任しています。しかし残念ながら、世界は渋沢の理念を裏切るような方向に進行していききました。

援や運営支援をしていきます。女子教育も重視し、日本女子大学の校長や東京女学館の館長に就任しています。

民間外交でも活躍

幕末にヨーロッパに旅行した経験のある渋沢は日本の国際関係にも関心がありました。明治以来、日本からアメリカの西部に多数の人々が移民しますが、排斥運動が発生して日米関係が深刻な事態になりました。そのような背景から政府は渋沢に関係改善の努力を要請します。そこで一九〇二（明治三五）年に渡米して実態を調査し、六年後に五〇名以上の経営者や技術者からなる団体の団長として訪米して様々な交流をしています。

有名な話題は一九二七（昭和二）年にアメリカ人宣教師が日米で人形を交換して友好関ととして世界に登場していった九〇年間を経済の分野で牽引しただけではなく、教育や福祉や文化など国家として維持していくべき分野においても理念だけではなく実践してきた渋沢は近代日本を代表する人物です。ベストセラーになった『論語と算盤』は見事に渋沢の人生を集約した題名ですが、七月から発行される一万円札を使用しながら、その経済価値以上の価値を想起すべき人物です。

つきお よしお

一九四二年生まれ、東京大学工学部卒業、工学博士。名古屋

大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て

東京大学名誉教授、専門は通信政策、仮想現実。

趣味はカヤックとクロスカントリースキー。

著書は『縮小文明の展望』『先住民族の叡智』『転換日本』

『清々しき人々』『凛々たる人生』『爽快なる人生』『A-Iに

使われる人A-Iを使いこなす人』など多数。